

〔第30回学術集会 シンポジウム1〕

## 母親の産後うつ病をパートナーは早期に発見できるのか パートナーによる産後うつ病モニタリング尺度EPDS-Pの可能性

愛知医科大学看護学部

山本 弘江

親子や夫婦から得たDyadic dataは、家族の中で起こっている事柄や課題に対する多面的な捉え方を明らかにすることができます。一方で、家族は互いに影響し合う存在であり、家族成員間で同じように感じたり、見えたりすることもあります。本発表では、子どもの誕生に伴い家族が直面する課題に対して、その共通性に着目してDyadic dataを扱えるかという視点で論じていきます。

周産期メンタルヘルスの問題は、深刻な社会問題となっています。中でも産後うつ病は気分の落ち込み（抑うつ）と興味の減退を主症状とし、重症化すると自殺や心中に至ることが指摘され、その背景には、初めて接する小さな命を一人で守らなければならないという『孤独な孤育て』があるとされています。産後うつ病は早期発見、早期介入が重症化予防に有効であり、そのスクリーニング法のひとつとしてエジンバラ産後うつ病自己調査票（以下、EPDS）を用いることが推奨されています。この尺度は10項目の自記式質問紙であり、カットオフ値が示されていることから、現在多くの医療機関や保健機関で用いられています。しかし、EPDS日本版の開発者である岡野らは、産後うつ病の母親が医療機関を受診する割合は約10%であり、自身のメンタルヘルスの不調に気づいても早期受診につながらない可能性を先行研究で指摘しています。O'Haraら（Moran, O'Hara, 2006）は、EPDS10項目をパートナーが採点できるようにしたEPDS-Pを開発し、パートナーによる産後うつ病のモニタリング評価を提案しました。本発表では、EPDS-P日本語版を作成し、パートナーによる産後うつ病徴候のモニタリ

ングの可能性について行った研究（山本弘江、池田真理（2021）. EPDS-P日本語版を用いたパートナーによる産後うつモニタリングの可能性. 日本看護科学会誌 J. Jpn. Acad. Nurs, Sci., 41, 106-113）を紹介します。

1か月児健康診査を受診した健康な児を育てている夫婦を対象に、無記名自記式調査票を用いて、夫婦それぞれの産後うつ病の徴候と、父親にはパートナーである母親の産後うつ病徴候のモニタリング評価尺度（EPDS-P日本語版）の回答を得ました。本研究に先立ち、EPDS-P開発者に日本語版の開発許諾の手続きを行い、周産期メンタルヘルスの研究を行う研究者計3名と検討し、日本語版を作成しました。プレテスト実施後、逆翻訳にて原版との整合性を確認し、日本語版と原版との意味内容に差異が認められないことを開発者に確認しました。調査票は夫婦それぞれの回答をお互いが閲覧しないことを説明書に明記し、夫婦別々に返信用封筒で回収し、夫婦のデータは封筒に記載したIDで連結しました。

147組の有効回答から、母親のEPDS得点と父親が評価したEPDS-P得点との間に有意な弱い相関が認められるなど、いくつかの興味深い結果が得られました。母親の産後うつ病徴候をパートナーである父親が早期に発見することはできるのか、その可能性と課題について論じました。

### 文 献

- Moran, T. E., O'Hara, M. W. (2006). A partner-rating scale of postpartum depression: The Edinburgh Postnatal Depression Scale-Partner (EPDS-P), Archives of Women's Mental Health, 9, 173-180